



手形のグループホームで談笑する(左から)佐々木さん、西根さん、太田さん、世話人の三浦さん、長谷川さん。佐々木さんは夕食を食べながら



「クローバー」の目印、ロンドンバス。施設では卓球も楽しんでいます



地域の中で普通に暮らすことなんです。

グループホームを始めた「杉の木園」園長 澤田修明さん



子どもたちの自立にご理解を

市内初の知的障害者のグループホームということで、家を探すのに苦労しました。知的障害者が入居するというと大家さんに断られるんですよ。結局、7軒目で現在の大家さんから了解をいただき、スタートすることができました。

グループホームは県北や県南には多いんですが、市内ではまだよく理解していただけていないのかもしれない。

自分たちの生活を自分たちの力でやる。そこが、施設や家庭と違うグループホームの良さです。家にいると甘えが出てしまい、せっかく子どもたちが持っている力を出せなくなる場合もありますから。親御さんも子どもを離すのが不安なようですが、自立していく子どもの姿を見て喜んでもらっているようです。

グループホームを経験し、そこから自分でアパートを借りて一人で生活している人もいます。グループホームへの入居希望者はまだいるので、いい場所さえあれば、もっと作っていきたいと考えています。

長谷川さんは、「最初は不安だったけど、ぼくが熱を出した時には仲間が薬を用意してくれたりして、とても仲良くやっています」と、楽しそうに話してくれました。

かけがえのない場所

西根征暁さん(27歳)、太田茂利さん(25歳)、長谷川真さん(20歳)、佐々木真基さん(18歳)の4人は、手形の一軒家で、十月からグループホームの生活をしています。知的障害者の通所更正施設「杉の木園」のバックアップで行っているものです。グループホームというのは、

数人の知的障害者が街の中にある普通の住宅で、世話人の援助を受けながら共同生活をおくるものです。市内ではこれが初めてですが、障害者の新しい生活形態として、全国では二千か所

浜田にある「つどいの家」は、障害者を持っている人たちが毎日自宅から通って働いている小規模作業所です。養護学校を卒業した人たちが日中の活動の拠点としていて、多くのかたの協力により「卒業後の生活を豊かにする会」が運営母体となっています。市内にはこうした作業所が十数か所あり、百人を超える障害者が元気に働いています。